

彼岸花が境内に咲き始めました。10月には、世界聖餐日、献身者奨励日です。収穫の季節、どこか遠い世界のことではなく、私自身に、献身ということを問いかけてみましょう。どのような神様の促しが感じられますか。どう応答しますか。

最後の晩餐

世界遺産のレオナルド・ダ・ビンチの「最後の晩餐」は、まさしく今朝の聖書の場面です。あの作品は、キャンバスに描かれたものではありません。何か特別な時だけに展示される聖画ではなく、修道院の食堂の壁画に、毎日の生活の一番目につく場所に飾られていました。それは、「わたしの記念としてこのように行いなさい」(28節)と言われたイエス様の言葉と響き合っています。

人生の苦しみの一つは、自分がどうして生きているのか分からない、という不安です。糸が切れた凧のように、ふわふわと浮いてはいるけれど、この先どうなるか分からないからです。最後の晩餐で、イエス様は聖餐式を制定されました。それは私たちのいわば凧糸です。神の救いにあずかり、その御心に応答して、献身することを思い起こさせる良い緊張を与えるためでした。神の愛の臍の緒と言えるかもしれません。

凧糸は、凧に大きな緊張をもたらします。しかし、それゆえに、高く舞い上がり、人々を喜ばせ、元気づけます。聖餐式、そして礼拝で、自分が神様によってこの世界に命を与えられ、その愛に生かされていることを、思い起こしましょう。自分が生きる意味が、改めて示され、深い苦しみの中でも、引き上げられるでしょう。

いのちを与えられる契約

一般的に教会は「敷居がたかい」と言われます。またクリスチャンでも、毎週礼拝に行くことがしんどいと感じる時があります。きよめの恵み、献身は、自分には分からない、と平気という人もいます。それは、半分は理解できます。自分を引っ張る凧糸が、窮屈で、世の中の流れに身を任せたっていいじゃないか、と思うからです。

でも、半分はやはり誤解だな、と思います。イエス様が私たちに示してくださった、神様の愛がどれほど大きいかを、見過ごしていると思うのです。十字架は文字通り、命がけの犠牲でした。そして、この最後の晩餐を行った、ユダヤの祭は過越祭と言って、子羊を屠ってその血を門に塗る習慣が二千年以上繰り返されていたのです。その由来は、奴隷の身分だった自分たちの祖先が、海を二つに分ける奇跡によって救い出され、解放されたという、エジプト脱出の恵みでした。

四千年前から、注ぎ続けられていた神の恵みの流れに、どうして私たちは逆らうことなどできるでしょう。敷居が高く、しんどく、その偉大さが分からなくて当然です。けれど、それは私たちに命を与える契約であり、惜しみなく注がれる愛なのです。